

# 一 兒童の文章表現力の發達

—— 蒲池 美鶴 さんの ば あ い ——

有 富 洋

兒童の文章表現力の發達については、わが国において、大正期以來、意欲的に調査・研究が継続され、多くの先行研究が集積されてきた。

本稿では、それらの先行研究の中から、父親としての立場から長女（美鶴さん、昭和34年4月入学）の六年間の文章表現力の發達のあらましを考察した、蒲池文雄教授（現在、鹿児島女子大学教授・愛媛大学名誉教授。当時、愛媛大学教育学部助教・教授、国文学担当。）の研究を取り上げ、一兒童の文章表現力の学年的發達過程を明らかにしていきたい。蒲池文雄教授の研究は、多くの先行研究の中でも、最も研究水準の高いもの一つであり、そこでとらえられている、兒童の文章表現力の学年的發達の密度の高さは、他に類例がない。

蒲池文雄教授は、次に示す四編の論稿において、美鶴さんの各時期の文章表現力の実態および發達について、綿密な考察を加えられた。

1 「父親としての作文教育論」（「国語研究」32号、昭和34年11月、愛媛国語研究会）／＼入学前～一年生▽

2 「わが子の作文を見つめる」（同上誌、35号、昭和35年11月）／＼二年生～三年生第一学期▽

3 「わが子の作文のあゆみ」（同上誌、38号、昭和36年9月）／＼三年生～四年生第一学期▽

4 「『もぐらの観察』をめぐって」（同上誌、39号、昭和37年2月）／＼「もぐらの観察」（四年生九月十三日作）の分析および一年生から四年生第二学期までの、動物の観察を主とした文章における観察力と表現力の發達▽

また、このほかにも、蒲池文雄教授は、直接美鶴さんの文章表現力の学年的發達を論じたものではないが、次のような論稿をまとめいられる。

5 「わが子の作文に想う―読書感想文について―」（同上誌、41号、昭和37年11月）／＼四年生第二学期～五年生第一学期的読書感想文の実態▽

6 「小学生と俳句」（同上誌、44号、昭和38年11月）／＼『小学生ミチルの句集』をめぐっての、六年生第二学期の夜（昭和38年7月25日）の家族の話し合い▽

7 「『わたしは小学生』の生まれるまで―『あとがき』に代えて―」（『わたしは小学生』昭和39年9月30日、くろしお出版）

△「わたしは小学生」の成立事情と美鶴さんの文章表現力を育てた家庭的要因▽

8 「一児童の作文学習の歩み―文集『わたしは小学生』の生まれるまで」(『国文学』47号、昭和43年7月、広島大学国語国文学会) △「わたしは小学生」の成立事情と表現意欲・文体の面からみた六年間の文章表現力の問題点▽

これら八編の論稿の内容から明らかなように、美鶴さんの文章表現力の学年的発達については、蒲池文雄教授によって、主として、一年生から四年生の初めのころまでの実態が明らかにされているのである。

したがって、本稿では、前掲1・2・3の論稿によりつつ、一年生から四年生初めごろまでの美鶴さんの文章表現力の学年的発達が、蒲池文雄教授によってどのように分析されているかという点を中心に、検討していきたい。さらに、高学年の実態を補う意味で、4の論稿を参考にして、動物の観察を主とした文章群を取り上げ、六年間を通しての叙述力の発達過程をとらえていくようにしたい。

## 二

まず、美鶴さんの文章表現力の学年的発達を、1入学前、2一年生、3二年生、4三年生、5四年生(二学期ごろまで)の五つの時期に分けて、それぞれの時期の発達過程が蒲池文雄教授によってどのように分析・把握されているかを検討していく。

△1入学前の文章表現力の発達▽

蒲池美鶴さんは、小学校入学の日(昭和33年4月8日)に、自ら

進んで、二編の文章(日記)をまとめた。この二編の文章は、蒲池文雄教授によれば、「こどもの書いた最初の日記らしい日記」(前掲「父親としての作文教育論」同上誌、5ペ)であった。

蒲池文雄教授は、その論稿「父親としての作文教育論」において、小学校入学の日(日記を書く素地となった美鶴さんの文章表現力の発達過程を明らかにされている。それによれば、入学前の美鶴さんの文章表現力は、①絵(一才九か月ごろ)→②漫画調の絵(四才ごろ)→③漫画の連続した場面にごく簡単なことばを付したもの(四才五か月ごろ)→④絵日記(絵を主としたもの、四才五か月ごろ)→⑤日記(五才一か月半)という段階を経て発達していった(同上誌、4〜5ペによる)。すなわち、美鶴さんのばあい、「文章を作る能力も、表記の力も一応はあり、絵日記や日記文を書いた体験さえもあって、入学直後に日記を書く態勢は一応整っていた」(同上誌、5ペ)わけである。

△2一年生における文章表現力の発達▽

美鶴さんの一年生における文章表現力は、日記の分量(入学の日からすすんで書き始め、一年間に二百九十二編、五日に四日の割合)、段落意識(三学期ごろから、説明したくてたまらないことを書いた文章では整ってくる)、会話を写す力(読書によって習得したが)、文字力・表記力(幼稚園の夏休みごろに、いぬいとみこ著『ながいながいペンギンの話』を視写した体験によるところが大きい。)のいずれをとっても、極めて高い水準にあり、著しい発達を示したことが明らかにされている。

これらのうち、会話を写す力についてみると、文章の中に会話が

入ってきた最初のものは、四月十日の日記であった。その後、美鶴さんの日記は、「四、五月は、時折、(中略)簡単な会話を写すにとどまってい」(同上誌、9ペ)だが、「六月から七月にかけて、対象をリアルに写す力がまし、文もずっと長くなるにつれて、会話の分量もまし、写し方も生き生きとして来た。」(同上誌、9ペ)さらに、十二月二十二日の日記では、「会話を次々と写す場合、『という』と『ときくと』と『いいました』などのことは、あるいはその主語となることば」(同上誌、11ペ)を適宜省略して、文章をひきしめることができるまでに発達してきている。

文字力・表記力についてみると、入学の日に書いた二編の日記において、すでに、「全然読点を用いず、句点はつけおとしたところもある。しかし、ひらがなの形はほとんどできており、大部分のかなづかいはい正しく、拗・促音の表記は完全である。」(同上誌、6ペ)までに達している。

蒲池文雄教授は、一年生における美鶴さんの文章表現力を育てた要因として、①読書する環境の中に育ったこと、②家族がよく話しあいの場合を持ったこと、③両親が日記の愛読者であったこと、④こどもの日記を大切にしたこと、の四つの家庭的要因をあげられ、さらに、学校における指導面として、担任の先生が、日記を丹念に読み、いたわり深い批評を書き、教室で何度か美鶴さんの日記をとりあげて読んでくださったことなど、細心な指導が行われたことを指摘されている。(同上誌、12〜16ペによる。)

美鶴さんのばあい、そのすぐれた文章表現力は、生活・学習の両面にわたって、読書環境・作文環境・談話環境など、文章表現力を

伸ばし育てていくための環境が、細密な心くばりによって整えられ、適切な指導が加えられることによって育てられたことを銘記しなくてはならない。

### △3 二年生における文章表現力の発達▽

蒲池文雄教授は、二年生になってからの美鶴さんの文章表現力の発達について、「全般として、まとまった、ねらいのはっきりした、構想もしっかりとした文が書けるようになった。また事がらをおもしろく書く力もできてきた。したがって、一そう長い文も書けるようになった。(二年生の三学期では、四百字詰で三、四枚の文がふつうである。)」(前掲「わが子の作文を見つめる」同上誌、29ペ)と述べていられる。二年生になって、美鶴さんの文章表現力が、構想力・叙述力(特に、詳しく書く力)・記述量の三面において発達してきたことがおさえられている。

このように、美鶴さんの文章表現力が二年生になってめざましい発達をみせてきた要因としては、二年生のはじめから三年生の夏休みまで、「一応草稿を書かせ、(中略)簡単な話しあいをし、こども自身に多少の手を入れさせた上、ノートに清書させることにした。」(同上誌、29ペ)ことがあげられている。一年生の時に、「ノートにぶつつけ本番に書」(同上誌、29ペ)き、「具体的な文の添削や、推考の指導はほとんどしてやらなかった」(同上誌、29ペ)のに比べ、二年生になって、意図的な推考指導の行われたことが、発達の要因として示されているのである。

一方、二年生になってからの美鶴さんの作文の傾向としては、今まで述べたような発達の側面のみが現れてきたわけではない。この

点について、蒲池文雄教授は、「全般として、とくに注意しななければならぬのは、作文を書くことをおっくうがる傾向が、かなり出てきたことである。これは一年生の終りごろにきざしていたのだが、二年生の間に、次第に強くなってきた」（同上誌、29ペ）と指摘されている。このように、美鶴さんが、「上級に進むにつれて、一年生のはじめに見られたほどのさかんな表現意欲が見られなくなった」（同上誌、39ペ）原因について、蒲池文雄教授は、次の六点を示していられる。

1 一年生のはじめは、あたらしく学んだ「かな」という表記手段で、自己の見聞を表現できること、そのことが珍しくおもしろかったが、書きなれるにしたがって、その感激がうすれたこと。

2 身の小さなできとも、はじめは、なんでも作文の対象になりやすかった。しかし、そのうちに、作文を多く書いただけに、新鮮な、表現意欲をそられるような題材が、身辺に得られなくなったこと。

3 読書に対する興味は、二年・三年と急激にまし、表現よりも享受、鑑賞の方に関心がかたむいたこと。

4 その読書というのは、童話・物語などの文学的なものが大部分で、自分が文を書くばあいも、その影響で、リアルな作文よりも、フィクションをまじえたものを好むかたむきがでてきたこと。

5 二年生になってからは、ローマ字文以外は、草稿を書き、それを推考の上、清書するよう指導したことが、文を書くことを、おっくうがらせたこと。

6 こどもの最初のころの文章表現は、他人に読んでもらうことをはっきり意識したのではなく、ただ文を書くことがおもしろくて書いた。それは、自己満足的なもので、しいていえば自分のために書いたのである。（このことは、現在、こども自身も、当時の気持をふりかえって認めているところである。）ところで、その文章表現が、家庭や学校で、作文教育という軌道にのせられ、だんだん他人の目を意識したものにかわっていく過程の中で（一面、そのために表現意欲がのびもしたが）、当初の、おのずからな、書きたくてたまらないで書く、のびのびとした表現態度がうすれていき、また書くのがおっくうになる、ということもおこった。（同上誌、39〜40ペ）

美鶴さんの表現意欲が低下した原因としては、1 表記手段「かな」に対する興味の減少、2 新鮮な題材の減少、3 享受・鑑賞への興味の増大、4 作風の変化、5 推考・清書のわずらわしさ、6 表現意欲の変化、の六点にわたって、詳しく分析されている。これら六点は表現意欲の低下の原因の複雑さをよく示している。

さて、二年生になって美鶴さんの表現意欲が減退の傾向にあることをみてきたが、二年生の二期には、その回復のきざしもみえてきている。二年生になって減退していた、美鶴さんの表現意欲を、「一時的かもしれないが、大いにふるい立たせた」（同上誌、30ペ）ものは、ローマ字の学習であった。蒲池文雄教授は、美鶴さんがローマ字学習に取り組んだ動機について、「一口にいえば、それは、未知のものへのあこがれ、ということができる。しかし、その中には、二つのものがふくまれている。一つは、未知の文字に対する好

奇心であり、一つは、その文字で書かれている未知の物語を読みたいと思う心である。」(同上誌、30ペ)と考察されている。美鶴さんが積極的にローマ字学習に取り組んだのは、先に、表現意欲の低下した原因の分析1に示した、表記手段「かな」に対する興味の減少と深くかかわっている。すなわち、新しい表記手段を得て、その文字を使つての表現意欲が起きたと考へられたと考へることが出来る。

さらに、蒲池文雄教授は、美鶴さんの表現意欲が後退した原因の分析に基づいて、表現意欲ひいては文章表現力を発達させるための具体的対策(指導方針・方法に及ぶ)についても、以下の六点を示していられる。

1 原則として、ぶつづけ本番でノートに書かせる。ただし、自分でできるだけの推考はさせる。

2 一年生の七月から、日記に題をつけさせ、一つのまとまった作文を書くよう指導したが、今後は、形式にこだわらず、長短を問わず、作文というより日記性を重んじた指導を心がけ、題はつけなくてもよいことにする。

3 文体は、今まではすべて敬体で書いていたが、常体で書くこともやらせてみる。敬体は、低学年ではかならずしもそうではないが、他人に見せる意識とつながりやすい。自分のために、思うところをスバズバ書くのには、常体がいいと考へられる。

4 適当な題材があれば、適当な時に、今までのような作文(身近に取材した生活文)も書かせてみる。また、童話の創作なども作りたい時には作らせる。ローマ字作文は、ローマ字書きの本の読後感想文や、手紙の交換の機会などをとらえてやらせる。

5 読書には、ある時期になると読んだものに圧倒され、自分の書いたものに魅力を感じなくなるといふマイナス面と、取材、構想、表現、語いなどの上にプラスになる面とがあるが、読書が作文の上によい影響を与えるようにするために、今は読書が物語類を中心としているが、しだいにそのわくを広げるようにする。

6 読書によって、対象を、他人のめがねで眺めたり、受身の立場で、しかも外面的に描くことのないよう、読書や作文以前の日常生活そのものを充実させ、対象にはたらしきかけて、自分の力で対象を処理する意欲と実力をつけさせるように努める。

(同上誌、40~42ペによる。)

ここには、①推考指導方針の転換、②日記性を重んじた指導、③常体の採用、④童話の創作およびローマ字作文の指導、⑤読書範囲の拡大、⑥日常生活の充実、という観点から、表現意欲を盛んにさせ、文章表現力を発達させるための方策が、具体的に説かれている。以上、美鶴さんの文章表現力の発達過程上、二年生は、「文章表現の技術面では、いろんな点で、たしかに進歩が見られた。しかし、作文を書く意欲という根本的な点では(前項のローマ字のばあいは例外として)一年生の時より後退した」(同上誌、30ペ)時期であった。

△4三年生における文章表現力の発達▽

美鶴さんの文章表現意欲の低下の傾向は、三年生にも引き継がれ、その傾向は、夏休みまで続いた。(前掲「わが子の作文の歩み」同上誌、2ペによる。)この間、美鶴さんは、「身辺の生活に取材したりアルな作文を書く点では、その意欲に、かなり衰えが見られ

た」(同上誌、14ペ)が、一方で、「童話の創作には非常に興味を持ち、夏休みまでに、三編の相当長い童話を書き」(同上誌、14ペ)くようになった。

蒲池文雄教授は、美鶴さんが熱心に童話の創作にとりくむようになった原因について、「このようなフィクションとしての作文が作られるようになった理由としては、(中略)身辺のリアルな事実を取材するふつうの作文にやうやくあきがきたという消極的なものと、二年生ころから、童話・物語類を読むことがますます多くなり、自分もまねをしてみたくなったという積極的なものがあがらねよう。」(同上誌、5ペ)と分析されている。

美鶴さんのばあい、三年生になって、童話の創作にとりくむようになったことは、これまでの、身辺のリアルな事実を取材するふつうの作文にもたたりなくなつたために、空想世界に取材した童話に新境地を求めたということであつて、三年生における美鶴さんの文章表現力(特に取材力)の発達を物語る現象の一つとみなすことができる。

さて、二年生以来の表現意欲の停滞現象は、美鶴さんが、三年生の二学期のはじめに、それまでの松山市立三津浜小学校から、愛媛大学教育学部附属小学校へ転校したことによつて、解消されることになる。表現意欲が回復したことは、作文の分量の面にさうく現れ、三年生一学期中の作文が合計十四編にとどまつたのに対して、転校直後の二学期の作文は、合計約百編にも達した(同上誌、5ペによる。)

蒲池文雄教授は、転校を契機として美鶴さんの表現意欲が再び盛

んになった理由について、「さて、転校してみたところ、新しいクラスの気風がきわめて民主的な、あかるいもので、娘を、新入りだからといって、女の子だからといって、少しも差別をせず、大切にしてくれたことが、その気持を大いに引き立てた。それに、担任の先生が、すぐ、こどもの氣質をのみこんで、ゆきとどいた心づかいをして下さつたことが、娘の心に『いっしょうけんめいやろう』という気持を吹きこんだ。作文意欲も、そういう根本のところと結びついて燃え上つてきたのであつて、単に転校して目先が変つたからさかんになつた、というようなものではないことを注意しておきたい。」(同上誌、6ペ)と説明されている。

これによれば、美鶴さんの文章表現意欲が再び盛んになったのは、書くための環境が整い、新しい学校生活から多くの刺激を受けることができるようになったためであることがわかる。したがつて、二学期以降、美鶴さんは、「ふたたび生活的なリアルな作文をきわめて熱心に書」(同上誌、14ペ)くようになり、そのために、童話の創作は、「二学期以降はほとんど作られず、翌年二月に一編が作られたにとどま」(同上誌、5ペ)ることとなつた。ただし、三年生二学期以降の取材は、それまでとは違つて、「学校生活が中心となり、家庭生活を取りあげたものは、ごく少なくなつた。」(同上誌、14ペ)

次に、「三年生の二学期から、四年生のはじめまでの作文の本質的な傾向としては、事象に、なぜ、どうして、と立ち向かい、その意味を、こどもなりに、せい一ぱい考えるようになったこと、自分の意見を、はっきり出していくようになったこと」(同上誌、14ペ)が

指摘されている。この傾向をよく示している作文として、蒲池文雄教授は、美鶴さんが転校後十日目に書いた「お立てり」（九月一日作）をあげて、内容・形式の両面から分析を加えられた。この「お立てり」という作文の分析において、蒲池文雄教授は、思ったことを端的に書ける常体を用いたことが、この作文の表現水準を高めたことを指摘されている（同上誌、718頁による）。常体で書くことは、二年生における文章表現力の発達のところでも触れたように、美鶴さんの停滞した表現意欲を盛んにするための手だての一つであった。

さて、作文「お立てり」に芽生えていた「思索的に立ち向かう態度」は、以後しだいに強くなり、三年生の三学期に書かれた作文「お化けとゆうれいについて」（二月十四日作）では、「おばけ」と「ゆうれい」の違いについて、思索的によく掘り下げられ、「生まれてはじめての論文らしいもの」（同上誌、8頁）となっている。

以上、美鶴さんの三年生における文章表現力の発達としては、転校による生活（学校）環境の変化と充実、および、蒲池文雄教授の意図的な作文指導によって、二年生以来の表現意欲の停滞を克服し、順調に文章表現力を伸ばしていった時期といえることができる。

#### △5 四年生における文章表現力の発達▽

蒲池文雄教授は、美鶴さんの四年生における文章表現力の発達をみる際の、重要な要因の一つに、「母親の作文への関与」のしかたが変化したことをあげられ、「母親の作文への関与は、直接、推敲指導や添削に及ぶことは、入学以来今日までほとんどなかった。それよりも、『何を書こうか。』という時に相談相手になってやるこ

と、あとで作文を読んで感想を述べてやることなどが主なことであった。（中略）ところが、最近、娘が四年生になってから、母親が相当はつきりとした指導をして、そのために、単に日常茶飯的な報告におわりかけていた娘の作文が、こどもの心の動きの生き生きとかがわかる文にまで高められた。」（同上誌、11頁）と述べている。この母親の指導によって生まれた作文には、「身体けんさ」（昭和36年4月14日～15日）があり、この作文においても、三年生以来の、思索的傾向が顕著である。

次に、この学年での大きな問題点は、再び、五月ごろになって、美鶴さんの積極的に書こうとする意欲が薄れてきたことである。蒲池文雄教授は、「その理由の大半は、通学距離が遠い上に、学校の勉強がいそがしくなり、時間的、気分的に余裕がなくなつたことにあると思う。」（同上誌、15頁）と分析され、さらに、「わたくしの知っていることの中にも、三年生までは熱心に書いてきたが、四年生になって、勉強が忙しくなり、書けなくなつたのが二、三例ある。このへんに、作文をよく書く子にとっての一つの関所があるようだ。」（同上誌、15頁）と重要な指摘をされている。美鶴さんを含めて、三～四人の事例からの帰納ではあるが、文章表現力の学年的発達上、四年生の時期に、指導上最も困難な時が訪れるという指摘は重要である。なお、この問題が、発達段階上の問題であるのか、あるいは、学習環境上の問題であるのかについては、言及されていない。

次に、四年生の九月には、美鶴さんの六年間の文章表現力の発達上の一つのピークが現れている。蒲池文雄教授は、美鶴さんの四年

生（昭和三十六年）九月十三日の作文「もぐらの観察」を、「この小学校時代の作文中、観察力、表現力の点から見て、一つのピークを示すもの」（前掲「児童の作文学習の歩み」、「国文学攷」47号掲載、7ペ）と位置づけていられる。

以上、四年生における文章表現力については、三年生に引き続いて、思索的傾向をもつ作文が母親の指導のもとに書かれていること、文章表現力の発達上の関所および発達上の一つのピークが九月ごろに現れたこと、をみることでできた。

### 三

次に、美鶴さんの叙述力の学年的発達（特に、四年生と六年生）を、動物の観察を主にした文章群を中心にとってみると、以下のようなことが確かめられる。

まず、一年生一学期の日記（六月二十三日、青むしのことを書いている。）では、すでにすぐれた観察力をもち、学年が進むにつれて文章表現力を伸ばしていく、下地ができており、三年生の「ねずみの子」（九月十八日作、転校後の作品、十六日の日記を参考にして書いたもの）で著しく叙述力が伸長している。

次に、四年生の「もぐらの観察」（七月二十六日の日記を、九月十三日に推考・清書したもの）では、六年間の叙述力の一つのピークに達していることに加えて、美鶴さん独自の叙述のスタイル・文体が芽生えてきていることが注目される。この作文では、その場面を描写・説明する文のあとに、その様子やありさまを要約・総括するような文（「ひじょうに力のいる仕事だ」、「新しい工夫だ。」

「とうちゃんもけんめいだ。」）をはさんで叙述が進められており、美鶴さんの叙述のスタイルを形成している。

さらに、六年生の「ミイコの話」（八月）では、四年生の「もぐらの観察」で芽生えていた、美鶴さん独自の叙述のスタイルが完成して行く。この作文では、「きつと、もとはどこかのかいねこだ。たのだらう。」「よほど、どんな感ねこにちがいない。」「ガンジの無抵抗主義とは、こんなものだらうか。」「まったく、このちよう戦のうなり声だけは一人前だ。」「かわいそうに、また負けたのだ。」「うれしさと感謝のいりまじった、感きわまった声だ。」「わが家のけっ作写真の一つだ。」「おもちゃにかみつくとは、まったくばかなねこだ。」「ミイコには、とてもこんな芸当はできない。」「ソビエトのポリショイ・サーカスのくまそっくりのかっこうをしているというわけだ。」という文が、要所要所にはさまれており、実に効果的である。これらは、美鶴さんの感想や判断を示す文であるとともに、その前に述べてきたことがらを要約・総括している文でもある。これらの文があるとならば、美鶴さんの叙述から受ける印象はいぶん異なってしまう。これらの文は、文章にリズムを生じさせるとともに、読み手の場面理解を容易にする働きをも果たしている。すなわち、六年生の「ミイコの話」に至って、対読者意識が強まったことが、美鶴さんの叙述のスタイルを完成させる上で、重要な要因となっているものと考えられる。

野地潤家博士が、「小学校六年間に生み出された作文・日記八〇〇編を、『ミイコの話』一編に代表させ、あるいは濃縮させることは、無理であるうか。わたくし自身は、『ミイコの話』の一編に代

表させることが可能であると考えている。すなわち、この「ミイコの話」一編に、美鶴ちゃんの六年間の文章表現力の結晶を見いだすことができる。結晶はまた結実である。」(野地潤家博士稿「高学年の表現像の探索―蒲池美鶴ちゃんのばあい―」学校教育研究会編「学校教育」昭和48年1月号掲載、「作文指導論」△昭和50年5月1日、共文社刊▽所収、61頁)と指摘していられるように、六年生の「ミイコの話」は、美鶴さんの六年間の文章表現力の到達点を示す作品となっている。

#### 四

以上の考察によって明らかになった、蒲池文雄教授の研究の成果としては、以下の七点をあげることができる。

- ① 指導の成果として達成されつつある文章表現力の発達ととらえられたこと
- ② 文章表現力の発達要因が、生活・学習の両面にわたって、具体的にしかも的確にとらえられたこと
- ③ 作文意欲の停滞期(二年生→三年生一学期、四年生五月→高学年)の実態とその克服の過程(ローマ字学習、転校による学習環境の変化と充実、意図的的作文指導など)が明らかにされたこと
- ④ 小学校入学前から入門期にかけての文章表現力の発達過程が克明に示されたこと
- ⑤ 三年生における童話の創作、三年生二学期から四年生にかけての思索的傾向の文章の発生など、一児童の文章表現力の発達過程が、文種の分化の様相も含めて、ダイナミックにとらえられたこと

と

⑥ 総じて、文章表現力の発達過程の分析が、作文学習個体史ともいふべき密度で記述されていること

⑦ 文章表現力の発達過程上の問題として、表現よりも鑑賞の方へ重点が置かれる傾向のあること、そして、その傾向が表現意欲を停滞させる一因となることが明らかにされたこと

なお、問題点としては、高学年の実態についての考察が保留されたために、四年生二学期以降の表現意欲の(再)停滞期および文章表現力の発達上の困難期の様相が確かめられなかったことが残されている。

蒲池美鶴さんのばあい、その文章表現力の学年的発達過程は、表現意欲の停滞期を含むとはいえず、それぞれの発達段階ごとに完成味をみせており、それぞれの学年および発達段階ごとに到達した表現水準は、わが国の標準的児童の水準をはるかに越えるものがあった。そのため、美鶴さんの事例は、ややもすると、特殊な事例としての側面だけが強調されるおそれがある。

しかし、美鶴さんのばあい、そのすぐれた文章表現力は、文章表現力を伸ばし育てていくための環境が、生活・学習の両面にわたって細心の心くばりによって整えられ、かつ行き届いた指導が計画的に継続された結果(成果)としてもたらされたものであることを、忘れてはなるまい。この意味で、美鶴さんの到達した表現水準は、わが国の作文教育の到達可能水準を示しているといえよう。

(福岡県立稲築高等学校教諭)